

英語の *ain't* に関する一考察

— R. Wright の文学の社会言語学的分析 —

On the Nature of *ain't* in English:

A Sociolinguistic Analysis of R. Wright's Literature

岡 村 徹

公立小松大学

Abstract: The aim of this paper is to consider the nature of *ain't* in tag questions in black English data as viewed from a sociolinguistic perspective. Furthermore, I would like to show the nature of *ain't* in the relationship with politeness theory. *Ain't* is used as a contraction for *am not*, *are not*, *is not*, *has not*, and *have not*. Generally, *ain't* is unacceptable in standard usage. It tends to be disapproved as a marker of less educated speech. On the other hand, *ain't* is often used as a tag question (You going to take the job, *ain't* you, Bigger?). What is important is that it functions as a marker of identity for the particular group within the community. We will consider the use of *ain't* in tag questions, paying attention to the issue of in-group members identity. We will show the use of *ain't* is related to factors such as formality and ethnicity. The study will contribute to our understanding of other English varieties such as Asian English and African English.

Key words: Black English, *ain't*, tag question, politeness, sociolinguistics

1. はじめに

一般に *ain't* は非標準的な言い方で、くだけた会話場面でよく用いられる、とされている。形式的には、*am not*, *are not*, *is not*, *has not*, *have not* の代わりとして用いられる。*is not* や *has not* に関して、藤井（2006）は、その二つが「*ain't* へと音声変化することは音声学的にはありえないのですが、無教育者の中には *ain't* からの類推によって、すべての「*be* 動詞+not」「*have* 動詞+not」の代用として使う人が出てきます」（p. 279）と述べ、英語史的にははじめからこれらの種類の代用がなされていたわけではないことがうかがえる。そこには類推という現象もかかわっていることが考えられる。この *ain't* は一般に教養のない言い方とされ、特に書き言葉では回避される。*ain't* は様々な文の種類の中で生じるし、統語的にも陳述節ばかりでなく、付加節にも生じる。本論文では、特に付加疑問文中に生じる *ain't* に対象を絞り、ポライトネス理論を援用しながら

ら、なおかつ、社会言語学的な視座からその用法について検討する。

まず ain't の用法をめぐる、辞書類の説明を概観しておきたい。

米国で出版された、Webster's II の *New College Dictionary* では、ain't の使用が標準的な語法ではないとの説明がある。

Nonstandard. 1. Am not. 2. — Used also as a contraction for *are not, is not, has not, and have not*. Usage: Even though it would be useful as a contraction for *am not* and as an alternative form for *isn't, aren't, hasn't, and haven't*, *ain't* is still unacceptable in standard usage. (1995: 23)

加えて、ain't の使用には地理的・社会的な差異も存在するようである。小西 (1981, 2006) は ain't が米国英語ではよく聞かれるとし、「これを did not の代わりに用いるのは米国の黒人英語に限られ、しかも男性の言葉に多い」(小西 2006: 39) との指摘をしている。地理的な差異という点では、*Merriam-Webster's Collegiate Dictionary* の第 10 版にもその説明がある (1998: 25)。小西 (2006) は ain't の用法について、「元来 'are not' の短縮形であったが、ときとして 'is not', 'am not', 'has not', 'have not' などの短縮形にも主語の如何にかかわらず拡張して用いられる」(小西 2006: 39、下線部は筆者) と述べている。たしかに主語は多種多様な種類が文頭に立つが、文頭に立つ主語名詞の種類には差があると筆者は考える。第 3 節で具体的に観察するが、ain't は 1 人称や 2 人称の代名詞と相性が良い。

同様に、『新英文法辞典改訂増補版』でも、付加節に生じる ain't をめぐって、「アイルランドでは、amn't I と言われたりする。しかし、ain't I を不可とする空気も強く、その反動としてイギリスでは、くだけた口語では aren't I? とも言われる」(1989: 81) とし、ain't の使用には地理的な差異が存在することがわかる。

さらに、『英語慣用法辞典改訂版』では、同じく付加節に生じる ain't をめぐって、「英国では aren't I? (ときに an't I?) が口語として認められた形であり、ain't I? は認められない」(1986: 36) とし、地域や国によって ain't をめぐる評価が異なることもうかがえる。なお、kucera による実証的な調査も取り上げており、それによると、許容度の高い順から aren't > ain't > an't となっていることが、その使用頻度とともに報告されている (1986: 36)。

一方、英国や豪州といった地域で刊行された辞書では、ain't の説明にあまり頁が割かれていない。例えば *BBC English Dictionary* と *Oxford Advanced Learner's Dictionary* では簡素な説明しかない (前者が 1992: 25, 後者が 2015: 33)。*The Compact Macquarie Dictionary* (1994: 19) も同様で、*The Penguin Macquarie Dictionary* に至っては、ain't の記載すらない (1986)。

それでも *The Concise Oxford Dictionary of Current English* には、方言レベルは別として、ain't の使用は教養がなく、話し言葉でも書き言葉でも容認しがたい、との説明がある (1995: 28)。

Collins English Dictionary にも同様の説明があり、それが話し言葉では避けられる傾向にあり、フォーマルな文脈では決して使われない、としている (1991: 31)。

さらに *Longman Dictionary of the English Language* には、*ain't* の歴史的な発達過程が説明されている。特に 17 世紀の後半から 18 世紀の前半にかけては教養ある人たちの間でも流行した。加えて米国英語では、教養のある人の間でも使われるが、それがユーモアを創出するときやインフォーマルな効果を出したいときに、限定的に使用されたことも指摘されている (1991: 33)。このことは *ain't* が米国英語でよく聞かれるという証左とも言えるが、次の第 2 節で紹介するように英国英語でも非標準的な場面で頻繁に使用される。

The Cambridge Australian English Style Guide には、*ain't* が様々な助動詞形の代わりをするることについて、コミュニケーション上は問題ないとしながらも、軽率な話し方といった印象を聞き手に与えるとの指摘をしている。また付加疑問文中に生じる *aren't I?* (*I'm supporting you, aren't I?*) については、これまでもそれが正式な用法ではないとする論争があったが、すでに多くの人がそれを使用しており、適切な形式の穴埋めをしてくれている、と説明している (1995: 32)。

最後に、*ain't* が付加疑問文と相性が良いことを指摘しておかなければならない。『ジーニアス英和辞典第 5 版』では、「付加疑問・否定疑問の *ain't* は他の場合に比べ許容度が高い；これは *ain't* が *am not* の縮約形 *amn't* に由来するという語源的理由と、他に適当な縮約形がないため；→ *aren't*」(2015: 51) であるとされている。

また『小学館ランダムハウス英和大辞典第二版』でも、「(米) では教養のない人たちが時に用いるが、(特に南部では) 教養ある人でも、くだけた話し言葉の中などでしばしば用いる。特に *I'm [I am] …* という文の付加疑問として、正式とされる *am I not*, あるいは話し言葉で許容されている *aren't I?* の代わりに用いられる」(1994: 58) とある。

A Merriam-Webster Webster's Dictionary of English Usage では *ain't* の通時的な観察をしており、*has not* および *have not* としての *ain't* は、他の形式よりも後で発達したものであり、明らかに 19 世紀にその痕跡がみられる、とした (1989: 60-62)。また必ずしも教養のない人によって使用されているわけではないとする。その根拠は *ain't* が *am not* や *are not* と類似性がないためであるとする。さらに書き言葉としての *ain't* の使用は、社会階級区分が低く、教養がなく、あるいは黒人の話し手であり、田舎者といった印象を与えるという。さらに言語地理学者によって収集された *ain't I?* の資料は『ウェブスター第 3 版』の編集に多大な影響を与えたが、それについて、バーンシュタインを引用し、それらの資料は今から約半世紀も前に収集されたものであり、今日でも有効であるとする根拠がない、とした。興味深いのは、*ain't* が単にユーモアとか悪ふざけで使われるのではなく、聞き手との一定の距離を保つために使用されることもあるとした点である (1989: 64)。

以上、英語圏で出版された辞典等を中心に観察した。次の第 2 節では、本論文を展開していく

うえで関連のある四つの研究論文を取り上げ、本題へと入っていきたい。

2. 先行研究

ここでは英語母語話者と雖も、実際の付加節の使用は非常に多様性に富んでいることを指摘した米国のランゲンドン（1972）、それから一般には ain't の使用に対して拒絶反応が強いと思われる英国でも、その特定の集団との結びつきが強いことを指摘した Cheshire（1991）、さらに民族方言としての性格を ain't に相当する語句 anei を通じて、豪州のノーフォーク諸島で観察した岡村（1995）、シンガポール英語の文末詞 lah が仲間内アイデンティティ・マーカーとしての性格を帯びていると指摘した、江田（2017）を取り上げる。

ランゲンドン（1972）は、米国で英語を教えている高校教師を対象に付加疑問に関するアンケート調査をおこなっている。その結果、職務上、高校教師は規範意識が強く、それぞれの言語環境における付加節の選択に幅が認められないことも予測されたが、実際は多種多様な付加疑問小詞の種類が観察された。例えば、No one watches TV any more. の文の付加節では、do they? が 26 名、does he? が 17 名、その他、であった。規範文法では、no one は単数扱いなので、ここは does he? が多く選択されると思われたが、実際は do they? も多数観察されている。しかしながら同様の調査を岡村（1995）がノーフォーク諸島で行うと、その多くが do they? を選択している。おそらくランゲンドンの調査では中高の英語教師を対象に行われたため、ノーフォーク諸島の被験者よりも規範意識が高かったと考えられる。そういう意味においては、do they? が特定の使用者と結びついていると言える。

Cheshire（1991）は、長期間における参与観察に基づいて、レディングの非標準的な英語を調査した。その結果、ain't は肯定文と、in't は付加疑問文との相性が良い、と報告した。また in't は特定の集団との結びつきが強い、すなわち仲間内アイデンティティ・マーカーとしての役割を担っていることも明らかにした。例えば、ain't は付加疑問文において、聞き手から返答を必要としない文脈では決して生じることはないが、in't はそのような言語環境でも生じうることを指摘した。これは特定の集団が自分たちを、他の集団と区別するために in't を使用するものである。

岡村（1995）は、豪州の海外保護領ノーフォーク諸島において、付加疑問文の研究をおこなった。その結果、ピトケアン系ノーフォーク島民はタヒチ語に由来する anei (or anieh) を付加節に使用し、他者との差異化をはかっている、との報告をした。例えば、Those two are coming, aren't they? という付加疑問文は、他にも下記のような言い方があり、これらはピトケアン系ノーフォーク島民によって使用されていることを突き止めた。一方、非ピトケアン系は標準的な言い方しかししない (Those two are coming, anieh? / Demtu kamen, aren't they? / Demtu kamen, anieh? (岡村 1995: 60))。

最後にシンガポール英語の機能について、フェイス威嚇行為の視点から考察した江田（2017）を取り上げる。江田はシンガポール英語の文末詞 lah を、ポジティブ・ポライトネスを表出する

文要素として捉え、同時にそれが、仲間内アイデンティティ・マーカーとしての性格を有していると指摘した。さらにその変種 *leh* や *loh* と比較し、ニュアンスの相違を記述した。そして今後の課題としながらも、シンガポール英語において、聞き手に同意を求める *isn't it?* もポジティブ・ポライトネスの機能を持っているとした。

以上の先行研究を通じて、一口に付加節と言っても、地理的・社会的差異が明らかに存在することがわかる。特に注意すべきことは、それが特定の集団のアイデンティティを確立するうえで重要なマーカーとして機能しているという点である。本論文ではその点に留意しながら、付加疑問文中における *ain't* の用法を考察したい。

次の第3節では、米国黒人文学作品の中から、R. Wright の *Native Son* を、そして映画作品から Spike Lee 監督の『マルコム X』の中に出現する *ain't* を扱う。これらを扱う理由は二つある。一つは、米国の黒人英語における *ain't* がその用法において、最も多様性に富んでいると思われる点、もう一つは、その多様性に富んでいる黒人英語の *ain't* の用法を観察することによって、現在、世界各地で多様化・国際化している英語変種の *ain't* 相当語句と今後、比較観察ができる、というメリットがあるためである。

ここでなぜこれらの作品を分析対象とするのかという批判があるかもしれない。なぜならば一口に黒人英語と言っても、米国内だけで実際様々な変種があるからである。さらに年代的な差異や作家による文体的な違いもある。そこで本論文では第一段階として、アメリカ黒人文学を代表する作家の一人である、R. Wright に対象を絞り、そこに生じる *ain't* の性質を調べ、後にその *ain't* の持つ規則性を他の作品や地域変種のそれと比較し、一般化するための資料として蓄積しておきたいと考える。なお、Wright 自身はミシシッピの生まれで、当該作品はシカゴが舞台となっている。

3. *ain't* の用法をめぐって

3.1. *ain't* の出現頻度

まず、Richard Wright の作品 *Native Son* の中で、*ain't* の出現は全部で 143 例観察された。そのうち約半数が主語が 1 人称のときであり、2 人称と 3 人称がそれに続く。固有名詞および人間名詞までその出現は伸びているが、無生物主語のときは *ain't* は観察されなかった。つまり名詞が無生物化すればするほど *ain't* の出現は減少する。次の表 1 は *ain't* の出現する言語環境を表わしている（生物名詞 > 無生物名詞）。

代表的な例文を以下に挙げる。なお 1 人称は、主語が単数の *I* や複数の *we*、2 人称は単数および複数の *you*、3 人称は単数の *he*, *she*, *it* や複数の *they* を含む。

表1 ain'tの出現する言語環境 (数字は出現回数)

名詞及び代名詞の種類	出現回数	(%)
1人称	71	49.7
2人称	23	16.1
3人称	24	16.8
人間名詞	2	1.4
親族及び固有名詞	1	0.7
動物名詞	0	0.0
自然の力の名詞	0	0.0
抽象名詞、地名	0	0.0

主語が1人称

- (1) I **ain't** scared. (Wright 1940: 24)

主語が2人称

- (2) You **ain't** my boss. (Wright 1940: 26)

主語が3人称

- (3) He **ain't** never had a chance. (Wright 1940: 301)

主語が人間名詞

- (4) That boy just **ain't** got no sense, that's all. (Wright 1940: 102)

主語が固有名詞

- (5) Bigger **ain't** decent enough to think of nothing like that. (Wright 1940: 12)

その他、上記表1にカウントされていないが、there構文で使用されるain'tが7例(4.9%)、現場指示の代名詞thatが同じく7例(4.9%)、nothingやnoneやnobodyといった不定代名詞が併せて3例(2.1%)、what you sayやmy nameやall of them I knowなど代名詞itやthey等で置き換えられるものが併せて4例(2.8%)、不明1例(0.7%)がある。次の3.2では、ain'tがどのような文の種類と相性が良いか、を探る。

3.2. ain'tと文の種類

ain'tは、否定文や疑問文や付加疑問文の中で観察される。下記の例文にあるように、単純な否定文として用いられることが多い(You ain't my boss.) (再掲)。

表 2 *ain't* と文の種類 (数字は出現回数)

文の種類	出現回数	(%)
否定文	120	84
疑問文	12	8.4
付加疑問文	11	7.7

一方、文を構造という視点から捉えると、単文、重文、複文の三つに分類できるが、その中で *ain't* の出現は圧倒的に単文の中で用いられる割合が多い。

単文 130 / 143 (91%) > 重文 11 / 143 (0.8%) > 複文 2 / 143 (0.1%)

重文の中での *ain't* の出現は決して多くはないものの、下記の例に見られるように、前件で *ain't* が使われたら、後件の節内でも決まって使われるという傾向が見て取れる。

(6) Well, she **ain't** in her room and she **ain't** in Mrs. Dalton's room. (Wright 1940: 120)

複文になるとさらに出現数が減るが、それでも *ain't* の出現が主節ではなく、従属節内に限定されるといった特徴がある。

(7) We can do it, if you niggers **ain't** scared. (Wright 1940: 24)

以上、*ain't* の出現する言語環境を意味と構造の視点から観察した。次の 3.3 では上記の付加疑問文に生じる *ain't* に対象を絞り、場面との関わりを考察する。

3.3. 仲間内アイデンティティ・マーカースとしての *ain't*

ここでは付加疑問文中に生じる *ain't* を場面との関わりで考察する。

まず、小説 *Native Son* 全体における付加疑問文の出現数は 60 例ある。その中で *ain't* を含む付加疑問文は 7 例出現する。これらの用例の多くが黒人どうしの会話場面で行われている。この *ain't* がどのような場面で使用されているのか明らかにする必要がある。

まず黒人同士の場面で観察される用例から見てみたい。下記 (8) は、主人公ビッグーの家族が集まり一緒に朝食をとる場面である。母親がビッグーの就職先を心配し、そのことを何度も母親から聞かされうんざりするビッグーとの会話である。付加節に *ain't* が観察される。

(8) “You going to take the job, **ain't** you, Bigger?” his mother asked.

he laid down his fork and stared at her.

“I told you last night I was going to take it. How many times you want to ask me?”
(Wright 1940: 11)

この ain't を用いて何をなすか。それはいつもの日常的なありふれた、かつ、無意識的に発話された会話の中での親子であることの、あるいは家族であることの ain't を通しての確認行為であると言える。ここで削除されている be 動詞を復元し、付加節として aren't you? を使うと、それは心理的に相手を遠ざけた言い方となり、もはや冷え切った家族の構成員としての一面をさらけ出してしまふ。

次の (8)' は行方不明になった娘を心配するドールトン夫人が、その娘の所在をビッグーに尋ねる場面である。ビッグーにとっては、それ(付加節の部分)が遠隔的な表現としてうつる。話し手(ドールトン夫人)と聞き手(ビッグー)の社会的距離は大きく、聞き手の話し手に対する力も大きい。ドールトン夫人は雇主であり、ビッグーは雇人である。二人の間には一定の社会的距離がある。ビッグーは仲間内では ain't を多用しているところから、didn't you? という付加節は黒人文化圏から外に足を踏み出した経験の少ないビッグーにとっては大きな負荷になると考える。したがってフェイスリスクも大きい。上記(8)の ain't を使った場面とは対照的な関係にある。

(8)' “You left the car in the driveway last night, didn't you?”

“Yessum. I was about to put it up,” he said, … (Wright 1940: 127)

次の(9)は主人公ビッグーと黒人仲間ガスが上空を飛ぶ飛行機を見ながら会話をしている場面で、ain't が使用されている。会話当事者の親疎の度合いが ain't の使用を左右する側面もある。下記(9)はビッグーが気ごろの知れた友人と一緒にいる場面であり、話し手が仲間意識を強調している場面と言えよう。また付加疑問文を使用することで聞き手を会話に引き込んでいるとも言える。自分の考えを他者と共有したいという願望の現れとしての付加節の使用である。下記(9)は白人世界と黒人世界を対照させることによって、話し手と聞き手の間の距離を縮め、あるいは融合を図る、といったポジティブ・ポライトネスの事例に相当する。ポジティブ・ポライトネスとは、滝浦(2008)によると、「“他者に受け入れられたい”・“よく思われたい”という他者評価の欲求を顧慮する戦略のこと」(p. 34)と説明される。換言すれば聞き手の考え(知識)を確認する行為と言える。事実、(9)の発話の後、ビッグーの親友ガスが “It better be funny,” と述べている。これは一種の「繰り返し」に相当し、ビッグーの話に対して自分も同意すると強調しているのである。付加節が話者の考えをあいまいにする、あるいはぼかすという視点に立てば、下記(9)の話者も断定的な言い方を回避していると言える。換言すれば、押しつけがましさが緩和された表現と言えよう。

そういう点では (9)' も同様である。話題が、ブラム商店街に強盗に入る計画についてであり、主人公ビッグーはそれを実行に移すのは内心怖くもあり、神経質になっていたが、そのことを黒人仲間ガスに指摘される場面で、指摘されたことに対して逆上する中での *ain't* の使用となっている。やはり話し手 (ビッグー) がその計画に対して熱意があることを聞き手に見せざるを得なかった、積極的に関与したいという意志を表出せざるを得なかったことが、*ain't* の使用へと繋がっていったと思われる。be 動詞の省略や縮約も話者の気持ちを聞き手に迅速に伝えるのに一役買っている。ブラウンとレビンソンのことばを借りれば、ポジティブ・ポライトネスの一例ということになる。

(9) “It’s funny how the white folks treat us, **ain’t** it?” (Wright 1940: 17)

(9)' “You trying to make a fool out of me, **ain’t** you?” (Wright 1940: 38)

例文 (9) から付加節を取り除くと、下記の (9a) のようになり話し手の断定的な意味合いが強くなる。そこには聞き手の考えを確かめるといったニュアンスはない。*ain't* 以外の付加節 *isn't it?* を使った表現 (9b) では、*ain't* を使ったときの仲間意識および連帯感といったものが感じられない。そういう意味において、*ain't* は仲間内での会話を促進する働きも担っていると考えられる。

(9a) “It’s funny how the white folks treat us.”

(9b) “It’s funny how the white folks treat us, isn’t it?”

したがって、上記 (9a) が聞き手を意識しない言い方であることを考えると、[-聞き手] という意味素性を抽出できる。(9b) は [+聞き手] とされる。日本語の終助詞「ね」を分析した滝浦 (2008: 144) の言葉を借りれば、「聞き手への共有の確認・促し」となりうる。ただ気をつけなければいけないことは、聞き手への共有の確認を必要としない付加節もある点である。例えば、先に挙げた Cheshire (1991) では、付加節に生じる *in't* は特定のグループがそのグループ外との差異化を図る際に、使用頻度が高くなることを突き止めた。

そういう意味においては (9) も同じだが、ここに「仲間意識」というレベルを取り上げ考察すると、次の表3のようになる。共通する文学作品の下での付加節の比較である。*isn't it?* が必ずしも白人世界の産物ではないのと同様に、*ain't it?* も必ずしも黒人世界の産物というわけではない。どちらの世界においても、話者の心理的な状態によって、コードスイッチが行われる。ここで「聞き手への共有の確認・促し」の意味が存在する場合、[+聞き手]、それが存在しない場合を [-聞き手] とする。そして、それを使うことで「仲間意識・連帯感」を高める要素がある場合、[+仲間意識]、それが存在しない場合、[-仲間意識] とすると、下記の表3になる。ただ

表3 付加節と意味素性

付加節の種類	意味素性 a	意味素性 b
付加節ゼロ	[-聞き手]	[-仲間意識]
isn't it ?	[+聞き手]	[-仲間意識]
ain't it ?	[+聞き手]	[+仲間意識]

しこれは黒人英語話者の視点から捉えたものとしてまとめている。

次の例文(10)は、後に主人公ビッグーに殺されることになるメアリと、そのメアリの白人の男友達ジャンが、主人公ビッグーの運転する車の中で会話をしている場面である。ジャンがメアリの飲みっぷりがいいことに気づき、例文にあるように言及しているという点において、ポジティブ・ポライトネスの側面を有していると思われる。このように黒人どうしの会話でなくても、ain't を使った用例が他にもいくつか観察される。一般に米国では、W. ラボブの研究で知られているように、白人の中産階級でも男らしさを表出するために、黒人英語の特徴を駆使する場合がある。しかもここでは黒人の運転手(ビッグー)がその場において、話題がくだけていることも手伝っての ain't の出現と思われる。メアリがビッグーに黒人霊歌は歌えるか尋ねる場面があるが、話題が黒人霊歌に及んでいたこととも関係がありそうだ。

またメアリの、明らかに飲みすぎという行動に対して、ジャンがそれをあからさまに否定するのではなく、むしろ付加節を使ってその現実を再確認することによって、話し手と一緒にその場を楽しく過ごしたい、という願望が働いていると言えよう。そういう点で、この発話は聞き手に対する FTA (フェイス侵害行為) を小さくしていると思われる。他者の立場に立った言い方と言えよう。

(10) “Going heavy tonight, **ain't** you?” (Wright 1940: 77)

次の例文(11)は黒人の女友だちベッシーと主人公ビッグーとの会話場面である。ビッグーが大金を手にしている様子を見て、どこでどうやってそれを手に入れたのか疑念に満ちた表情を浮かべながらビッグーに質問をする場面である。この中に、陳述節に ain't が含まれ、付加節に生じない用例が観察される。しかもその陳述節の ain't は同じ陳述節内に他の否定語とともに用いられ、二重否定の構造を形成している。二重否定の構造とそうでない構造のどちらも、黒人どうしで行われる。つまり、黒人どうしでは二つの表現が選択可能であり、非黒人では一つしかない。この発話が黒人どうしという文脈でのみ使われているところから、仲間内アイデンティティ・メーカーとしての性質が強い、と言えるであろう。

(11) “You **ain't** got into nothing, is you?” (Wright 1940: 133)

次の場面は、ドールトン家で働くアイルランド系の家政婦ベギーと主人公ビッグーとの会話である。依然としてメアリの所在がわからず、皆が彼女をさがしている状況が続いている中での会話場面である。やはり陳述節内に *ain't* の使用が認められるが、その陳述節は二重否定の構造ではない。したがって上記の例文とは異なる。

- (12) “You **ain't** scared of all this trouble we're having round here, are you, Bigger?” (Wright 1940: 187)

次の例文 (13) は、ドールトン家の娘メア리를偶発的に殺害したビッグーの弁護を担当する弁護士マックスと主人公ビッグーとの会話である。決して黒人どうしの会話ではない。当初ビッグーはこの弁護士を信用していいかどうか迷っていたが、徐々に自分の気持ちを話せる対象の一人として捉えるようになった中での *ain't* の使用である。弁護士マックスが抱いている疑問に対して、ビッグーが不一致を避けたことによって、会話がさらに進行していく。ビッグーはこの事件について語り、自ら納得して電気椅子に足を運びたいという衝動も加わって話はさらに進行していく。このように *ain't* には会話当事者間の信頼関係が高まるにつれて、その出現率が高まるといった側面がある。話はビッグーがなぜ殺人を犯したのかということに及び、それは白人社会と黒人社会との大きな隔たりが理由であるとビッグーが再認識させられ、さらに諦めと絶望へと心が向かい、冷静に自己を分析していく中での *ain't* の使用である。加えて、この *ain't* は聞き手の返答を必ずしも必要としない。実際、この場面で聞き手は何ら返答を加えていない。

- (13) ‘I don't understand, Bigger. You say you hated her and yet you say you felt like having her when you were in the room and she was drunk and you were drunk...’ “Yeah; that's funny, **ain't** it?” (Wright 1940: 351)

下記の例文 (14) は黒人どうし (ジャックとビッグー) が映画鑑賞後に、ジャックが発した表現である。彼らにとって映画は非現実的な世界である。換言すれば *marked* (有標の) な世界と言える。その世界が標準的な付加節の使用を促したと考える。つまり、標準的な付加節の使用が意味するのは、映画という非現実的、かつ、*marked* な世界の表出である。彼らにとって映画は白人世界の産物であり、心理的にも距離がある。ビッグーのせりふはジャックの言ったことに対して異なる表現で繰り返され、自分の考えがジャックと一致していることを述べている。黒人どうしであっても、*ain't* を使ってウチ扱いされることもあれば、下記の例 (14) のように標準的な付加節を使ってソト扱いされる場合もある。これは自分たちの日常から離れた映画世界を双方が客観的に捉えているためであるとも言える。人間関係や文脈との連関によって、*ain't* の出し入れも異なってくる点を念頭に置いておかねばならない。

(14) Swell, wasn't it? Yeah; it was a killer, Bigger said. (Wright 1940: 34)

次はデンゼルワシントン主演の映画『マルコム X』のワンシーンである。この作品は、これまで分析の対象とした文学作品とは、時代も背景も媒体も異なるが、関連を見てみたい。先行研究でシンガポール英語やノーフォーク英語、さらには英国英語や米国英語といった様々な変種の研究を紹介したが、変種が異なってもそこには文末の要素がことばのアイデンティティーを表出するような、いわば時代や背景を超越した、人類言語に普遍的な装置としての枠組みが存在するように思える。その基本的な枠組みを追究するための初歩的な考察へと繋げていきたい。

例文(15)は、マルコム妻となるベティとの軽食カウンターでの会話場面だが、互いに出会って最初の食事ということもあって、付加節に ain't が生じない。まだ互いのことが十分わかっておらず、同じ黒人どうしても会話がごちこちない。互いに一定の距離を置いた言い方となっている。この後、マルコムとベティとの間で ain't が使われる場面はないが、ain't を使うことによって、近接化が図られると言っても過言ではないだろう。ain't はまさにポジティブ・ポライトネスとしての位置と役割を担っていると考ええる。

(15) They want you to quit the Muslims or they won't pay your tuition, isn't that it? (Spike Lee 1993: 140)

次の例文(16)はとあるバーで、マルコムとやくざアーチャーが会話を行うシーンである。マルコムにとってアーチャーの存在は他の人から感じられない何かを持っている人物として映っていたが、日常的に差出がましく言われることに少々嫌気がさしていた中での付加節の使用である。600ドルの貸しがあるはずだが、とマルコムはアーチャーに挑発的にくってかかる。マルコムがいらいらしている場面であり、アーチャーとの間に心理的に距離のある場面での付加節 didn't it? の使用となっている。ところがその直後の同じ場面で、今度はマルコムが付加節に ain't を使っている(例文 17)。賭け事でマルコムに騙されたアーチャーがやって来て、一触即発の緊迫した場面になっている中で、マルコムが付加節を使用している。ここでマルコムは自分の身に危険が迫ったため、質の公理にわざと違反するような発話を行い、相手をはぐらかそうとする。立場が悪くなっているのは自分のほうだと認識し、それが me or you と表現することで時間をかせぎ、その場からの脱却を図ろうとする。主人公が根拠のないことを述べたことにより、聞き手との会話を終結させようとしている。それが、日ごろ使い慣れた付加節の使用と共に会話の終結化を促している。これは場面によって、ain't を出し入れしている証左と言える。

(16) 1, 2, 8 hit, didn't it? (Spike Lee 1993: 76)

(17) It's me or you, **ain't** it, Pops? (Spike Lee 1993: 86)

次の例(18)は、マルコムが二人の人間に命を狙われているという事実を聞き手と共有している場面である。マルコムは「命が危ないのは自分のほうである」ということを、付加節を使うことによって聞き手であるアーチャーに確認、念押しをしている。「みんなお揃いか。死ぬんだな」は、「死ぬのはアーチャーではなく自分のほうである」という現実を聞き手であるアーチャーに再確認していると思われる。

(18) And every cats watching, **ain't** they? (Spike Lee 1993: 86)

最後に付加疑問文を作ることができない言語環境を取り上げ、上記文学作品ではどうか、観察してみたい。まず今井・中島(1978: 170-171)にもあるように、陳述節の主語がIで、時制が現在、述語動詞が主観的感情を表わすものであったり、遂行動詞である時には、付加節は生じない¹⁾。この規則は上記文学作品にもあてはまる。しかし付加節に生じる *ain't* が仲間内アイデンティティー・マーカーとしての機能を担っているのであれば、上記の規則のように振る舞うとは限らないかもしれない。つまり上記規則に逸脱するような例が観察されれば、それは益々 *ain't* が仲間内アイデンティティー・マーカーとしての性質を帯びてくるということになる。

また疑問文の後や埋め込み文にも付加節が後続しない²⁾が、このような言語環境で、もし付加節が後続するのであれば、やはりここでも益々 *ain't* の仲間内アイデンティティー・マーカーとしての性質が強まる。また陳述節も付加節も否定形である付加疑問文については、その用法をめぐって、文法家の間で論争がある³⁾が、同様の理由でその際に生じる *ain't* は仲間内アイデンティティー・マーカーとしての性質を帯びたものと判断できる。しかしまだ十分に用例が集められていないので、これ以上の深入りはしない。今後の課題とする。

4. アジア英語との関連性

冒頭でも述べたように、黒人英語の付加疑問文中に出現する *ain't* の性質を調べることは、その他の英語変種の *ain't* 相当語句との比較が可能になる。たとえ、*ain't* 相当語句の形式が異なろうとも、根底にある意味は共通しているかもしれない。例えば、シンガポールでは *You're teaching us today, is it?*、インドでは *He came today, isn't it?*、マレーシアでは、*You're from Japan, is it?*、スリランカでは、*Upili returned the book, isn't it?* といった付加疑問文が聞かれる(トラッドギルほか(1986) / 本名(1990))。いずれも付加疑問文の迷路を回避する方向で単純化されている。つまり主語や動詞の種類に合わせて、付加節の形態を考えなくても良い、という意味である。そういう点においては黒人英語の文法的な機能と同じかもしれない。付加節の使用はそれぞれの民族集団のアイデンティティーとかかわる問題であると考えられる。特に文末に生じる付加

節は、形式的な相違を生むことで、集団間の差異化がはかられる。

アジア英語の中に is it? (または isn't it?) の変異形はあるのかなのか、もしあるとすれば、個々の変異形はどういった社会的属性と結びついているのか。個々のアジア英語とアイデンティティーの問題を考えるうえで、重要な研究になると思われるが、本論文ではこれ以上深入りはしない。

5. まとめ

以上、本論文では付加節に生じる ain't をめぐって、第一段階として R. Wright の作品を中心に考察した。その結果、付加節に生じる ain't は黒人話者に選好される形式ではあるが、話者の心理的な変化にも左右されることがわかった。ain't の使用は、場面とのかかわり、特に聞き手が話し手とどういう社会的な位置関係にあるか、話題は何か、くだけた場面であるかどうか、といったことが重要だが、黒人話者の間では聞き手が自分たちにとって仲間として位置づけられるかどうか ain't の使用を大きく左右する。ain't は [+聞き手]、[+仲間意識] といった意味素性を有している。標準的な付加節と ain't を使った付加節の間には一定の距離があり、後者は語用論的により近接化された表現と言える。

今後は他の英語変種における ain't 相当語句の分析を通じて、黒人英語のそれとの比較観察を行って一般化し、アイデンティティーを確立する手段としての付加節の全体像を描いていくことが大切であるとする。本論文はそのための第一段階としての考察をおこなった。

注

- 1) 「陳述節の主語が I、時制が Present、述語が主観的感情を表わすものであったり遂行動詞である時には、付加節が後続できない (例文は省略)」今井／中島 (1978: 170-171) を参照。
- 2) 今井／中島 (1978: 170-171) 一部例外もある。詳しくは今井／中島 (1978: 171) を参照。
- 3) 詳しくは今井／中島 (1978: 173) を参照。

参考文献

- 今井邦彦・中島平三 (1978) 『現代の英文法 第5巻 文 (II)』東京：研究社。
- 岡村 徹 (1995) 「ノーフォーク島の英語」『英語教育』大修館書店 44, vol. 5, 60-61.
- 江田優子ペギー (2017) 「シンガポール英語の機能——フェイス威嚇行為の観点から——」*Language and Linguistics in Oceania*, 9: 70-81.
- 小西友七 (編) (2006) 『現代英語語法辞典』東京：三省堂。
- 滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』東京：研究社。
- トラッドギル, P.・J. ハンナ. (寺沢芳雄、梅田巖訳) (1986) 『国際英語』東京：研究社。
- ブラウン, P. / S. レビンソン. (田中典子監訳) (2011) 『ポライトネス——言語使用における、

- ある普遍現象—』東京：研究社.
- 藤井健三（2006）『アメリカの英語— 語法と発音』東京：南雲堂.
- 本名信行（編）（1990）『アジアの英語』東京：くろしお出版.
- ランゲンドン, T. (今井邦彦訳) (1972) 『英語変形文法の輪郭』東京：大修館書店.
- Cheshire, J. (1991) “Variation in the Use of *Ain't* in an Urban British England Dialect”, In P. Trudgill and J. K. Chambers (eds) *Dialects of English*, London and New York: Longman.
- Swan, M and B. Smith (2001) *Learner English: A Teacher's Guide to Interference and Other Problems*. Cambridge: CUP.

参考にした辞典類等

- A Merriam-Webster Webster's Dictionary of English Usage* (1989)
- BBC English Dictionary* (1992)
- Collins English Dictionary* (1991)
- Oxford Advanced Learner's Dictionary* (2015)
- Spike Lee with Ralph Wiley, *Malcolm: The Trials and Tribulations of the Making of Malcolm X*, Great Britain: Vintage (1993)
- The Compact Macquarie Dictionary* (1994)
- The Cambridge Australian English Style Guide* (1995)
- Webster's Collegiate Dictionary (Tenth Edition)* (1998)
- Wright, Richard, *Native Son* (1940)

